

折に触れ 四字熟語

NO. 60 『歳寒松柏』 さいかん (の) しょうはく

< 意味 > すぐれた人物が逆境にあっても節操や志を変えないたとえ。冬の厳しい季節にも緑を保っている松や柏の意から。

< 出典 > 「論語」<子罕^{しかん}>

「子曰、歳寒、然後知松柏之後彫也。」

読み下し：『子の^{のたま}曰わく、歳寒くして、然る後に松柏の彫^{しか}むに^{のち}後^{しば}るることを知る。』

通 釈：先生がいわれた、「気候が寒くなってから、はじめて松や柏が散らないで残ることが分かる。〔人も危難の時にはじめて真価が分かる。〕」

なお、諸橋轍次は「論語の講義」の中で『これは、事あって初めて平素積み重ねる修養の本領が現れることを述べたもので、「盤根錯節に遇はずんば、何を以て利器を別かたんや」というのと同様である。忠臣烈士を讃えた美しい言葉といえよう。』と付け加えています。

語 釈：「歳寒」は冬の厳しい季節。転じて乱世や逆境のたとえ。「栢」は柏の異体字で、このてがしわ。「彫」は、ほる、きざむ、で覚えています、しばむ、なえるも辞書に載っています。落ちぶれるという意味の凋落は彫落とも書きます。

一 言：論語シリーズその5

NO. 59の最初の2字が同じですが、論語が出典の四字熟語です。この度の衆議院議員選挙で立憲民主党が躍進したのは、この四字熟語のような精神を選挙民が評価したからでしょうか。

参考文献：岩波文庫・金谷治訳注「論語」 大修館書店・諸橋轍次著「論語の講義」三省堂「四字熟語辞典」